

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 24 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720229

研究課題名(和文) 日本語疑問文の歴史的变化についての言語学的研究

研究課題名(英文) Linguistics study on the historical change of Japanese interrogatives

研究代表者

衣畑 智秀 (Kinuhata, Tomohide)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：80551928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の疑問文がどのように変化し、また、疑問文から変異した構文がどのように発達したかを明らかにすることを目的とするものである。本研究の結果、日本語の直接疑問文については、上代から中世まで助詞や構文によって疑問詞疑問と肯定疑問を区別しようとする変化があることが明らかになった。また、間接疑問文の歴史変化は、一般言語学で想定されている「主観化」という変化に反するものであることが分かった。さらに、係り結びと間接疑問文の関係を調べるため、琉球語宮古方言の記述や疑問文の調査も行った。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to clarify the historical change of Japanese interrogative sentences and the development of some constructions derived from them. As the result of this project, we have reached to the conclusion that wh questions and yes-no questions are differentiated by particles and/or the constructions of particles at least until Late Middle Japanese. We concluded as well that the change of indirect questions in Japanese constitutes a counter evidence to the hypothesis of 'subjectification.' In addition, we described the phonology and grammar of Miyako Ryukyuan to investigate the relationship between kakari-musubi constructions and the use of indirect questions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：疑問文 間接疑問 日本語史 琉球語 係り結び

1. 研究開始当初の背景

これまで日本語史研究において、疑問文については多くの研究が蓄積されてきたと言える。しかし、その中心は奈良から平安期、そして鎌倉期が中心であり、その後の歴史変化については、さほど明らかになっていない。その背景として、疑問文の研究は、係り結びの研究と合わせて行なわれてきたことが考えられる。係り結びは、平安時代に多用され、その後、院政鎌倉期には固定的になり、消滅したと考えられている。また、係り結びは古典語を特徴付ける構文と見なされ、多くの研究が行なわれたため、結果、疑問文の研究も、この時代が中心になったと考えられる。

そのような状況の中、中世以降の疑問文についても触れた研究がいくつか見られる。たとえば、阪倉篤義(1975)『文章と表現』(角川書店)(1993)『日本語表現の流れ』(岩波書店)では、中世では文末のゾ、カが、疑問詞疑問、肯否疑問で使い分けられていたことなどが指摘されているが、全体的に歴史を素描した研究であり、正確なデータが提示されていない。また、近世以降の研究はさらに少なく、阪倉氏は、現代語の疑問詞疑問は「～(の)だ?」という文末形式が使われる(カは使われない)としているが、独り言で使われる疑問詞疑問文では文末のカも使われる(「何があったのだろうか?」)など問題があり、いつから文末のカが疑問詞疑問で使われるようになったのかなど、詳しいことは分かっていない。

このように、疑問文の研究は、従来平安期を中心に行なわれてきたが、中世以降に、疑問文が他の構文と関連し、興味深い歴史変化を遂げていることが近年明らかになっている。まず、奈良・平安時代の疑問文に使われていた助詞カ、ヤは、直接疑問文にしか使われなかったが、中世後期に間接疑問文(誰が来るかが分からない)を表すようになることが、高宮幸乃(2005)「各助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語日本文学16』によって実証的に示された。また、この疑問助詞カは、現代では選言(うどんかそばを食べる)や不定(何かが落ちていた)としても使われるが、これらの用法も、奈良・平安時代には存在せず、それぞれ、15世紀、19世紀に新たに発達したものであることが、筆者の研究で明らかとなった(衣畑智秀・岩田美穂(2010)「名詞句位置の力の歴史 選言・不定用法を中心に」『日本語の研究』6-4)。

2. 研究の目的

以上のような研究状況を踏まえ、本研究では、平安期以降も視野に入れて、日本語の疑問文がどのように変化し、また、疑問文から変異した構文がどのように発達したかを明らかにすることを目的とした。また、疑問文の歴史を明らかにするだけではなく、一般言語学的な意味を考察し、日本語史の記述から

一般言語学への貢献を目指した。さらに、従来の疑問文の歴史的研究では、大凡の歴史についてのみ記述され、その研究の基礎データとなる調査の詳細が示されないことが多かったため、本研究では、歴史文献から得られたデータを客観的な基準で分類し、今後の日本語史研究でも利用できるようなデータベースの公開を行うことも研究目標とした。

3. 研究の方法

疑問文の歴史を明らかにするために歴史資料の調査を行った。直接疑問文の調査を行ったのは以下の文献である。

『万葉集』(8世紀) 『伊勢物語・大和物語・兵注物語』(10世紀) 『古今集・後撰集』(10世紀) 『土佐日記・蜻蛉日記』(10世紀) 『源氏物語』(11世紀) 『今昔物語集』(12世紀) 『覚一本平家物語』(14世紀) 『史記抄』(15世紀) 『天草版平家物語』(16世紀) 『虎明本狂言集』(17世紀) 『近松浄瑠璃集』(18世紀) 『洒落本大成』(18-19世紀) 『黄表紙・洒落本』(18世紀) 『春色梅児誉美』(19世紀) 『浮世風呂』(19世紀) 『吾輩は猫である』(20世紀)

ただし、直接疑問文の用例を採取するにあたっては、その数が膨大となるので、それぞれの文献の冒頭から使われる疑問文を300～500例集めた。

間接疑問文については、以下の文献を調査した。

『史記抄』(15世紀) 『虎明本狂言集』(17世紀) 『近松浄瑠璃集』(18世紀) 『洒落本大成』(18-19世紀) 『春色梅児誉美』(19世紀) 『浮世風呂』(19世紀) 『吾輩は猫である』(20世紀)

間接疑問文は、直接疑問文と比べると用例数が少ないため、全ての例を集めた。

以上で集めた疑問文の用例について、その特徴を入力したデータベースを作成した。直接疑問文には、疑問詞疑問か肯否疑問か、質問か自問か、どのような助詞が使われているかなどの情報を加えた。間接疑問文については、主節の動詞、主語の人称、極性、時制などについての情報を加えた。

このようにして作ったデータベースをもとに、疑問文の歴史変化の過程を考察するとともに、それが一般言語学においてどのような意味を持つかを考えた。また、そこから得られた仮説が単に日本語だけの事実ではないことを実証するために、琉球語宮古諸方言との対照も行った。先行研究では、宮古諸方言の係り結びについては簡単な記述があるが、間接疑問や選言、不定についてはほとんど記述がないため、筆者自身のフィールドワークによって、データを収集した。

4. 研究成果

(1) 直接疑問文の歴史変化

『万葉集』 『源氏物語』 『覚一本平家物語』

『史記抄』『虎明本狂言集』のデータを元に、日本語の直接疑問文の歴史変化には、疑問詞疑問と肯否疑問を助詞や構文によって区別しようとする変化の方向性があることを明らかにすることができた。また、そのことにより、これまで問題となってきた中古語におけるカとヤの複雑な分布にも、歴史的な説明が与えられることを示した。

具体的には、中世末には、直接疑問文は、肯否疑問にはカが付き、疑問詞疑問にはカが付かないという形で、疑問詞疑問と肯否疑問は区別されるが、それ以前にも、中古語では疑問詞疑問は「カに係り結び、助詞無し」、肯否疑問は「カの文末、ヤに係り結び、ヤの文末」という形で区別されるなど、日本語の疑問文の歴史変化には、疑問詞疑問と肯否疑問を助詞や構文によって区別しようとする傾向が見られる。この変化の方向性を踏まえると、助詞ヤが間投助詞から疑問助詞に変化したのは、肯否疑問専用の形式を作るためだったと考えればよいことになるが、それによってカとヤが共存したために、上代・中古には疑問助詞の複雑な分布が発生したと考えることができる。

(2) 間接疑問文の歴史変化

中世から近代に至るカによる間接疑問文の発達過程を詳しく調べ、その発達過程が、一般言語学的に想定される変化の方向性とは異なることを示した。

間接疑問文は、発生当初、主節が「知る」のような知識を表す動詞の場合、「私は～～か知らない」のように、一人称主語、現在時制、否定を伴って使われ、話し手が疑問の答えを知らないという意味で使われていた。しかし、これが近世・近代になると、「～～か知らなかった」のような過去時制や「彼は～～か知らない」のような三人称主語の例が見え始め、話し手が答えを知っている場合でもカによる間接疑問文が使われるようになることが分かった。カは古代から直接疑問文で使われていたが、その時は、カは必ず話者の不確定性（話し手は疑問の答えを知らないという意味）を持っており、「知る」「聞く」「考える」などの動詞の項として埋め込まれるようになると、この話者の不確定性が薄れて行ったと考えられる。一般には、歴史変化に従って、話者に関わる意味は強くなっていく「主観化」が起こるとされるが（Traugott E. C. & R. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge U.P.）この変化は逆の方向を辿っており、一般言語学的に見ても興味深い変化であるということが出来る。

(3) 琉球語宮古諸方言との対照

これまでの筆者による研究などで、カによる選言・間接疑問・不定は、15世紀以降に発達したことが分かっていたが、この15世紀という時期は、カによる係り結びが固定化し衰退している時期でもあることが研究成果

(1)でも確認された。よって、カによる係り結びと、カによる選言・間接疑問・不定は、日本語史においては相補分布をしていたことになる。このような係り結びと選言・間接疑問・不定の相補分布は偶然なのか否かを確かめるために、現在も係り結びが使われる琉球語宮古諸方言を調査した。

その結果、疑問専用の助詞 ga が係り結びに使われる宮古島南部諸方言では、この助詞が選言・間接疑問・不定を形成することがなく、疑問専用の ga が係り結びにならない北部の諸方言では、この助詞によって選言・間接疑問が形成されることがあることが明らかとなってきた。よって、係り結びと選言・間接疑問・不定の相補性は日本語史の偶然によるものではなく、前者が後者の発生を抑制していた可能性が高い。今後も、この問題について、調査範囲を広げ、その理由も含めて考察を行っていく予定である。

(4) 琉球語宮古狩俣方言の記述

日本語と琉球語宮古方言の、疑問から派生した構文の対照を行うには、宮古方言の記述も同時に行っていく必要がある。特に、狩俣、島尻、大浦といった宮古北部諸方言の記述的研究は少なく、どのような音素や音韻規則を認めるかを決めておかなければ、それらの方言で使われている疑問の標識を形態的に分析することも難しい。そこで本研究では宮古島最北部の狩俣集落の音韻・文法についても記述を行った。

記述は、音素の確定や音素配列、形態音韻規則のような音韻の記述と、名詞に付く接辞・助詞、形容詞の用法と形態法の関係、動詞の活用など形態論を中心とした文法の記述を行った。

(5) データベースの公開

本研究で調査を行った文献のうち、代表者が目を通したものについては、ホームページ上で公開している。間接疑問文のデータベースは、調査した用例全てが公開されている。直接疑問文のデータベースは、論文を執筆する際に基礎データとして使用した『万葉集』『源氏物語』『覚一本平家物語』『史記抄』『虎明本狂言集』の冒頭から300例のデータが公開されている。この直接疑問文データについては、論文に詳細を述べた。この論文によって、どのように文献の例が整理され、本研究の成果に繋がったかが明確になっている。このような論文に用いたデータの可視化は、従来の日本語史研究ではあまりされない新しい試みであると言える。これ以外のデータも、整理され次第、順次公開していく予定である。

(6) その他の成果

以上の他、例示を表すヤラの歴史、大阪方言の終助詞ネンについても研究成果を得た。前者では、例示を表すヤラ（田中やら山田

やらがやってきた)が疑問を表すヤラからどのように発達したかを明らかにできた。

後者では、大阪方言の終助詞ネンが、疑問文で使われる場合に話者のバイアスを伴うことを、ネンがイントネーションのように超分節的に働くことと分析することで説明できるということを論じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

衣畑 智秀、日本語疑問文の歴史変化 上代から中世、日本語文法史研究、査読無、2号、2014、頁数未定

衣畑 智秀、上代から中世の疑問文の様相 データ解釈を中心に、福岡大学人文論叢、査読無、46巻1号、2014、pp. 1-39

衣畑 智秀、林 由華、琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法、琉球の方言、査読有、38号、2014、pp. 17-49

KINUHATA Tomohide, Historical Development from Subjective to Objective Meaning: Evidence from the Japanese Question Particle *ka*, Journal of Pragmatics, 査読有, 44(6-7), 2012, pp. 798-814
<http://dx.doi.org/10.1016/j.pragma.2012.03.004>

KINUHATA Tomohide and Yurie HARA, Discourse Update and Semantic Composition of Particles: The Case of *Nen* in Osaka Japanese, Proceedings of Sinn und Bedeutung 16, 査読無, 2012, pp. 349-362
<http://mitwpl.mit.edu/open/sub16/Kinuhata.pdf>

HARA Yurie and Tomohide KINUHATA, Osaka Japanese *Nen*: One-sided Public Belief and Paratactic Association, Sprache und Datenverarbeitung, 査読有, 35(2) und 36(1), 2011-12, pp. 49-70

衣畑 智秀、日本語における話者指向性、福岡大学日本語日本文学、査読無、22号、2012、pp. 93-104

岩田 美穂、衣畑 智秀、ヤラにおける例示用法の成立、日本語文法、査読有、11巻2号、2011、pp. 60-76

[学会発表](計5件)

衣畑 智秀、上代から中世における疑問文の歴史変化、筑紫日本語研究会、2014年2月15日、九州大学

衣畑 智秀、琉球語宮古島方言の終止連体形、福岡大学日本語日本文学会、2013年1月12日、福岡大学

衣畑 智秀、主観的表現から客観的表現への歴史変化 間接疑問文の発達を通して、筑紫日本語研究会、2012年2月18日、九州大学

HARA Yurie and Tomohide KINUHATA,

Osaka Japanese *Nen*: One-sided Public Belief and Paratactic Association, Workshop on Formal Approaches to Discourse Particles and Modal Adverbs, 2011年8月12日、Slovenia

HARA Yurie and Tomohide KINUHATA, Discourse update and paratactic association of particles and intonations, Sinn und Bedeutung 16. 2011年9月7日、Utrecht University

[その他]

ホームページ等

<http://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tkinuhata/project/kaken2011/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

衣畑 智秀 (KINUHATA Tomohide)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：80551928